

古事記・日本書紀に親しむ参加のみなさまへ

疫病退散！ 巣ごもり期間企画 記紀神話とお祭りのお話

其の3 令和2年9月15日付

新川神社 宮司 船木信孝 筆

みなさん、お元気でしょうか！宮司の船木信孝です。

今年7月にそれぞれ再開したものの、第二波の影響で来年3月まで休講とさせて戴きました。ほんとに残念ですが、皆様の安全第一です。その代わりに引き続き古事記・日本書紀に親しんで戴ける補講をリモートでさせて戴きますので、コロナ禍開けの晴れ晴れしい再開の日まではこんな感じで宜しくお願いいたします。

さて、まずはみなさんに是非ともご覧いただきたい写真展のご紹介です。新川神社や私が奉仕するお宮の写真も展示されています。

木原盛夫 写真展 「とやま、祭り彩時季」

木原盛夫（高岡市福岡町出身）によるおまつり県・富山の祭りと芸能の写真展

【会 期】8月1日（土）～9月27日（日）

【入 館 料】一般500円、高校・大学生300円、中学生以下無料

【主 催】ミュゼふくおかカメラ館

詳細は同封のチラシをご参照ください。

古事記・日本書紀を読んだだけではわからない、祭の原風景がここにあります。

目に見えぬ神様があたかもいらっしゃる様に、「おわすが如(ごと)く」おもてなしをする「お鋤様(くわさま)」行事や、獅子舞や神振行事である曳き山のお稚児さんなどは「神を演ずる」ことにより「神人合一(しんじんごういつ)」、神様と一体になって楽しむことが「まつり」であることが写真展を見ますとよくわかります。

写真展を拝見して感じたことに、神を祭る鎮守の神社は我々の生活圈より離れた少し高い位置に配置され、また、神様をお招きする依り代(よりしろ)としてご神木、祭礼の幟旗、神社には千木(ちぎ)といわれるアンテナが置かれ、御神輿の上には「鳳凰(ほうおう)」と呼ばれる瑞鳥が置かれています。これは神様がいらっしゃる天と地をつなげる「垂直軸」を設けて「降りてきていただく為の装置」に他ならないということです。

現在各地で行われている様々なお祭りや神事は古事記・日本書紀に由来する物もあれば、韓国から渡ってきた渡来人の祖先神を祭る「高麗(こま)神社」など、大陸から伝わって土着化したものまで百花繚乱であることが感じていただけることと思います。

ただひとつ、神事であれ仏事であれ物事の根本にある物の考え方は、神仏が目に見えない存在でありながら存在するものとして「おわすが如(ごと)く」、神仏となんらかの方法で「繋がろうとしている」ことです。

そしてそのことは古事記・日本書紀では疫病が蔓延した国難に対して**崇神天皇が神に御神意をおうかがいされた事**に始まり、それから全国に神祭りを広められたことが**令和の現代まで繋がっている**ことを伝えています。

我々の祖先は**森羅万象の靈魂と精霊によってこの世界は充滿している**ことを感じ取っていたからこそすべての精霊は神としても畏怖崇敬されてきました。

家と人を守護する祖霊神、氏神、産土神が篤い信仰の対象となって来たのであり、そしてそのすべての神々を「ゆるやかに連携させる中心軸」にいらっしやいますのが国家鎮護の最高神である天照大御神です。

あらためてそんなことを感じた素晴らしい写真展でした。

実は写真家の木原さんとは改めてどこの誰でどんな目的で写真を撮っているのか？とかお話ししたことも無く、うちのお祭りにヒョッコリ現れて写真撮って良いですか？という感じで一見、写真好きのアマチュアカメラマンと思っておりましたが実は、東京で音楽雑誌の写真などを撮っていた本物のプロカメラマンでした。(失礼しました)

新川神社のお祭りもそうですが、四方の恵比須神社の海上渡御祭などにも気がつくとかメラを構えていらっしやったり、「神出鬼没」な得体の知れない感じの方でしたが、お話ししますと気さくな方ですし、一度田んぼ学校のミニ写真帳や撮影された写真

のコピーなども戴いた事もありましたので、うちみたいなマイナーなごちんまりとした祭礼にもどこで調べたのか、足繁く撮影されていましてので奇特な方だなあとも思っておりましたので、写真展の招待状をいただいたときはいささかビックリしました。

正直、久しぶりに感動致しました。私たち神職は実は祭礼時期は忙しいので他の神社の祭礼はあまり見たことが無いのです。TV や新聞などで知る程度で自分たちの職務を果たすのに精一杯で、他の神社の祭礼なども参考に成るので興味はありつつも実際にいけない事の方が多いので逆に一般の人の方が数多く拝観されているかもしれません。そのような祭礼の様子を写真で見ますと各地域の方々がほんとうに手間と労力とお金をかけてお祭りをもり立ててそして楽しんでいる様子が伝わりまして感動致しました。

全部拝見した展示館の出口付近に今回の展示のフォトブック『とやま、祭り彩時季』の 11 巻が販売されていまして。これは全部、貴重な富山の祭礼記録資料として蔵書しなければと思い、即購入を決意しました。一冊ずつ読み込むことが毎日の日課で楽しみでもあります。

第 7 巻目は新川神社の田んぼ学校の早乙女が表紙です。私も毎年泥の田んぼに咲く、紅白の早乙女の姿が好きで、この構図は鉄板です。



ほかにも猪谷の神社での湯釜神事で楽しそうに笹葉で熱湯を参拝者に振りかける宮司さんの姿が笑えます。

お寺の法事も掲載されているので神職としてたいへん参考になります。

今年は**新型コロナ蔓延防止の為、すべての祭礼神振行事が中止になっている中で、この場所だけは豪華絢爛な祭礼の風景が満載の場所**ですので、こんな時だからこそ、とやまの祭りのなんたるかを感じる事ができるグッドタイムリーな企画展だと思いました。

もちろん、偶然そういう時期に重なっただけですけど。是非、みなさんも見に行ってみてください。

every picture tells a story という、英語のことわざがありますが、《どんな絵にもそれぞれ物語がある》通り、いろいろな物語りが感じられる写真展でした。



そして、今回お届けいたしましたのは疫神齋の新しいバージョンです。

今後、第2波、第3波といつなるときどうなるか、予測が付かない状況ですね。テレビばかり見ていると不安が増すばかりですので、ワイドショーの見過ぎには気を付けましょう。

今回のテーマは「**油断大敵！免疫力向上**」にしました。世の中は経済を回さなければ死活問題になりますので人が動き出します。何時何処で感染するか、または感染に気づかずに感染源になるか、と考え出しますと不安と恐れで何も出来なくなってしまうのですが、**気持ちが弱くなりますとカラダの免疫力が落ちます**。

では、今何をすれば良いのか？何が出来るのか？と言いますと巷でもよく言われております、「**免疫力の向上**」ですね。これは一人でも出来ます。

このことは疫病対策のみならず、健康で過ごす事全般にあてはまりますので、今はつい緩みがちな「うがい・手洗い・マスク」を愚直におこない、「密閉・密集・密接」を避け、「不要不急の外出」をしないことを怠らないように「油断大敵！」ですね。

そしてメンタル(**精神**)面では
祈る・笑う・がんばりすぎない・くよくよしない

フィジカル(**身体**)面では
快眠・快食・快便・お風呂で保温・適度な運動

が大事だと言われております。

祈りの力と免疫効果

今年の3月以降、コロナ禍が広がる時に「いのり」ということに改めて興味が湧きました。私ども神職は「祈る」のが仕事ですのでこの伝染病が蔓延する世の中の人心に「いのり」がどのような働きをするのか、単純に興味を持ったからです。

先ずはその語源からですが、「い・のる」は「意・宣る」で

「意(い)=こころ:意見、意識」+「宣(の)る=宣言、宣告」

つまり「自分の心の内などみだりに口にしないことをはっきりという」という意味が込められています。

「祝詞(のりと)」の語意ですが、本来は「のる・こと(ば)」で「のり・と=宣・言」であろうかと思えます。

漢字は当て字ですので予祝(よしゆく)という「あらかじめおめでたい結果が起こりますように」という意味を込めてあらかじめお祝いする意味でお祭りの祝詞が読まれますのでこの字を当てたのだと思います。いわゆるお祝いの前倒しですね。ギャラの先払いみたいなもんですかね。

神様も稲作をする前に「本年も豊作でおねがいしまーす！」とご馳走をお供えされたならば、「しゃーねえな、いっちょ、やったるか」と御神酒を呑んだ勢いでかなえてくれるんじゃないか？みたいな。

「宣(の)る」とは、「神や天皇が神聖なる意向を人々に対し口で言葉にして表明すること」ですので普通の意見発表では無くてより真剣さが含まれる時に使う言葉です。

ですから「いのり」は古今東西、理屈抜きで、不安や恐怖心から自分の心を護るために人は行ってきたのでしょう。

祈ったから伝染病に感染しないわけではありませんが、不安な心や恐れる気持ちを持ち続けてしまうと精神が壊れ、身体的健康もそこなわれていくので、我々の遺伝子の中には恐れや恐怖感を緩和するための「祈りの遺伝子」が有るのでは無いかと思います。

※産経新聞ホームページより抜粋

祈りは遺伝子を「活性化」する 慈悲の心が免疫機能の強化につながる 筑波大学名誉教授・村上和雄

～(前略)～先に述べたマインドフルネス瞑想の研究では、宗教的要素を取り除いた瞑想様式にしている。しかしわれわれは「宗教的な祈りや瞑想」をそのまま研究対象にした。なぜなら「祈りや瞑想」は単なるリラクゼーションや集中力アップの手段ではなく、大自然と調和した一体感や神仏との合一体験などの意識状態の変性を伴うものであり、そこに「祈りや瞑想」の本質があると考えたからである。



僧侶は身心の感受性が強い

まず、祈りや瞑想が身心にどのような影響を及ぼしているかを調べるため、日常的に祈りや瞑想を実践している高野山真言宗僧侶における遺伝子発現の活性化(オン・オフ)の検討を行った。

すべての生き物は、生命活動に必要な遺伝情報を、DNA(デオキシリボ核酸)という化学物質の配列(塩基配列)として暗号化している。この遺伝情報を遺伝子という。

時間や環境の変化に応じて必要な遺伝情報を取り出す仕組みとして、遺伝子の発現をスイッチのようにオン・オフしながら調節している。すなわち、「オン」とは遺伝子の発現が活性化している状態、「オフ」とは遺伝子の発現が弱まる、あるいは停止した状態である。

この調節にはさまざまな要因が関与し、いわゆる「心」の状態も「オン・オフ」に影響することが知られている。われわれはこれまでに「笑い」によって、2型糖尿病患者の食後血糖値の上昇が有意に抑えられること、免疫系の活性が適正化することなどを報告してきた。

今回、「僧侶型オン遺伝子」として見いだされた遺伝子はいずれもI型インターフェロン関連遺伝子であった。I型インターフェロンはウイルスの増殖を抑えたり、感染した細胞を除去したりすることによって、ウイルスから身体を守っているタンパク質である。僧侶群におけるこの特徴は、

僧侶になるための修行か、あるいは日常の行において獲得・維持された資質であると考えられる。すなわち、僧侶では自然免疫系が全体に活性化していると考えられる。

一方で、僧侶は他人の感情や行動に対する共感の度合いが高かった。これは、僧侶の心理的な感受性の強さの表れといえる。本研究で最も興味深い結果とは、共感性と僧侶型遺伝子に一定の関連が見いだされたことである。僧侶における自然免疫系の活性化は、僧侶の身体的な感受性の強さの表れの一つとして捉えることもできる。

ここから、共感という心理的な感受性と、自然免疫機能という身体的な感受性に共通の基盤があることが推測される。これは、身心の関連を考える上で大変興味深い結果であり、**宗教性や祈りがそのような身心基盤の成立に関わっていることが推察される**のである。



村上和雄筑波大学名誉教授の著作本は多数ありますのでご参考までに読んでみられたらいかがでしょうか。

と、いうことで今回はこのへんで。

次回はもう少し古事記・日本書紀の話題に触れたいと思いますが、まずは写真展の開催期限が迫っておりますので、取り急ぎのご案内です。来週の連休などに訪れては如何でしょうか。

ところで古事記・日本書紀に親しむに参加の方はご自宅に神棚はお持ちですよね。毎日の日課としてお参りされてますか？

是非朝一番にお参りされますことをお薦め致します。（神棚の無い方は下記写真の簡易神棚は無料ですのでこの機会にどうぞ。申し込みは船木家まで。）

目に見えない神に心を寄せる習慣が「**気づき**」を多くし、「**直感力**」と「**正邪を見極める洞察力**」を導きます。お祈りするときは**我心の無い素直な気持ち**でお祈りすると神様は喜ばれるみたいですよ。

それでは、またの機会まで無病息災、お元気で！

